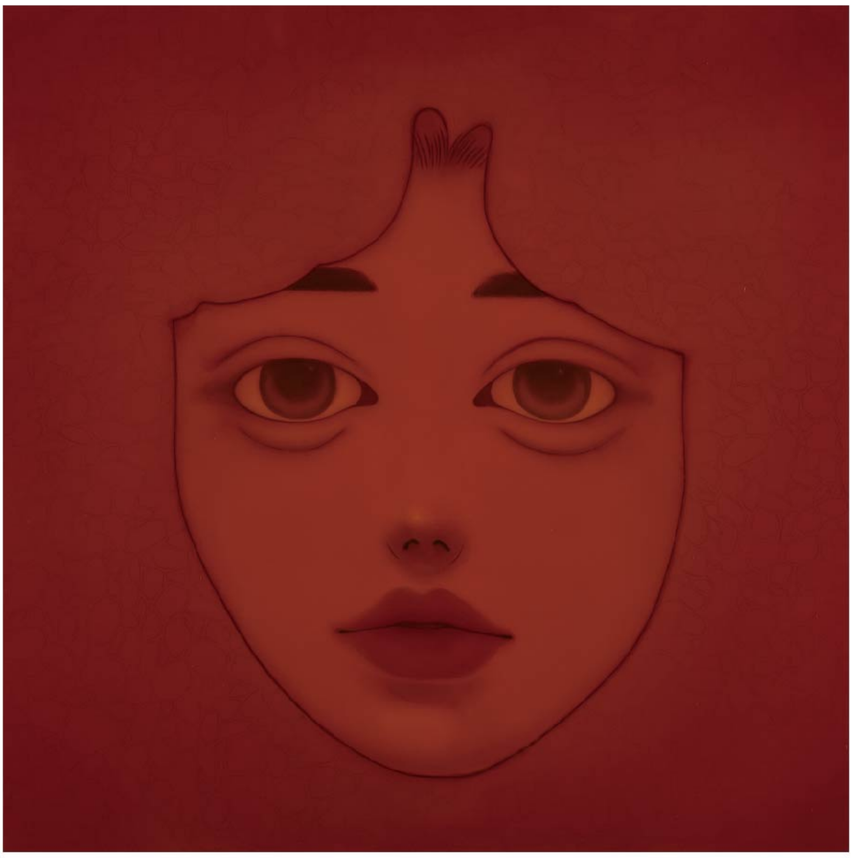
石井　杏奈
ISHII Anna



瞳は常に静観している I
油彩、キャンバス

瞳は常に静観している II
油彩、キャンバス

瞳は常に静観している
The eyes are always remain a silent observer

これまで、他者との関係性における心理的な居場所をテーマに制作を続けてきた。周囲の環境は身体や精神、人格形成に大きな影響を与えるが、環境は様々な要因で変化し、私たちはそれに順応しながらも常に居場所を求めているように思う。学部時代にテーマにしていた「思春期の女の子」はこの 2 年間で「居場所を求める女の子」へと変化した。それには 2019 年 12 月から始まった新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延が大きく影響している。未曽 有の事態に陥ったこの世界は急激に変化したが、おそらく私自身は何も変化していない。ただ、規制や周囲からの圧力などによって窮屈に感じることが増えただけだ。常に圧迫感のある中で生活している私は一体どこにいるの だろうか。自分の意見を常に持ち続けることの難しさを改めて痛感させられる今の世界で、私が私でいられるよう、私を認めて静かに見守ってくれる瞳が欲しかった。初めて自分のためだけに描こうと思った。

修了制作「瞳は常に静観している」では、世界から攻撃されることなく、安心していられる場所、生命の始まりの場所でもある母親の胎内から静かにこちらを見つめるもう一人の自分を描いた。これまで人物の瞳は、自身を守るために自らの内面に意識が向かうように描いていたが、この作品では自分だけを見つめていながらも外に意識が向かうような瞳を持たせた。瞳に光を入れることで、外界へのつながりを表した。自分がつくられる直前の細胞に見立てた様々な形で顔以外を覆い、キャンバスの外側にも細胞が視線と共に広がっていくような、現実に溶け込む世界を意識した。胎内という不可侵の世界からの瞳と見つめ合うことが、一つの救済となる。その瞳が私の輪郭を明快にするのだ。

人間は無意識にも、自分の居場所を構築するために、

溢れかえる情報から自分に都合の良い情報だけを選別している。そして、獲得した情報を共有することから生まれる連帯感が同調圧力に繋がっているのだろう。圧迫感のある中で自分を見失わないようにともがき続け、自分と他者を区別するための具体的な基準がどこにあるのかを常に探しているのだ。他者を通して自身が形作られる過程を意識することは、時に痛烈な痛みをもたらす。しかし、曖昧だった境界の輪郭を克明になぞることができたとき、自分の存在を実感することができる。

環境や他者との出会いが複雑に絡み合うことで生じた関係性や、自分の採ったはずの繊細な選択はいずれ「運 命」というたやすい言葉に表され、あがく私を嘲笑うかのようにがんじがらめにする。諦念を覚えたのはいつから だろう。遺伝子という鎖に繋がれ、感情を制御しながらの営みは一体いつ終わりを迎え、私は何になるのだろうか。そこから解放されるときには、きっと答えを得ているのであろう。